

七、時代を映す名大祭⑤—2000年代

◆第四一回〜第五〇回のテーマ

名大祭一覽(5)に、二〇〇〇年代における名大祭のテーマなどを示しました。

この時期の特徴は、テーマの単語化です。一九九〇年代のテーマの多くは、短いといってもフレーズであったのに対して、二〇〇〇年代のテーマは、ほとんどが単語になっています。

さらに、二〇〇二(平成一四)年には、それまでパンフレットにおけるテーマの説明文に必ず冠せられていた「テーマアピール」の語が消えました。すでにテーマアピールの簡略化が進行しており、テーマのメッセージ性の低下が顕著になっていましたが、ついにテーマは強いてアピールするものではなくなつたのです。このことを象徴するかのように、この二〇〇二年から、「テーマキャラクター」が毎年選定されるようになりました。

第一章で、二〇〇二年の第四三回名大祭のパンフレットに掲載された、名大祭から理念が喪失したことを指摘した本部実行委員会委員長のコメントを紹介しましたが、それに続けて次のように書かれています。

名大祭一覧 (5)

回	開催年	開催日	メインテーマ/サブテーマ	名大祭の動き
41	2000年	6/7～11	好きです、名大	エコツアー（スタンプラリー）はじまる。スケート企画の名称が「徹夜でスケート」となる。
42	2001年	6/6～10	白地図	
43	2002年	6/5～9	飛翔	「テーマアビール」の語が消える。テーマキャラクターの選定はじまる。 「アヤチユアバンドコンサート」なくなる。 「地域社会との調和と交流」の取組みはじまる。
44	2003年	6/4～8	夢空間	
45	2004年	6/3～6	活	
46	2005年	6/2～5	道草	
47	2006年	6/1～4	夢源	バリアフリーへの取り組み本格化。この年の第30回を最後に、グリーンフェスティバル終わる。盆おどり企画はじまる。
48	2007年	6/7～10	彩幻～サイン～	
49	2008年	6/5～8	夢滴	食中毒事件発生。
50	2009年	6/4～7	愛されて、はんせいき	飲食店全面自粛、スケート企画が徹夜ではなくなる。 飲食店、数を縮小して復活。「オーブンソングセレモニー」から「オーブンソング企画」へ。 フレイヤーストームなくなる。
51	2010年	6/3～6	だって、笑顔でいたいじゃない	

(各年の名大祭パンフレットより作成)



第48回（テーマ「彩幻～サイゲン～」）
のテーマキャラクター「サイタ」

しかし私は逆に第一回から変わっていない部分もあると思っています。それは名大祭の開催による「非日常空間」の創出です。（中略）「非日常の空間」である名大祭において皆さんが今まで知らなかった自分を発見したり、従来とはまた違った考えかた・価値観を発見することで自分の中の新たな可能性をきつと見出すことができるでしょう。

この見解にならうかのように、これ以降の名大祭のテーマに、「夢」や「幻」といった非日常（非現実？）的な用語が多用されるようになりました。

◆エコロジーとバリアフリーへの取り組み

一九九九（平成一一）年の第四〇回名大祭のパンフレットに、名大祭本部実行委員会による「名大祭ごみ非常事態宣言」が掲載されました。名大祭が大量消費・大量廃棄を繰り返してきたことを反省し、このスタイルから脱却して、新しい大学祭像を構築するため、ごみの減量、



「ごみステーション」(第51回名大祭)

リサイクルなどの環境プロジェクトを実施することを宣言したのです。これは、同じ年の二月に名古屋市が発した、「名古屋市ごみ非常事態宣言」に触発されたものでした。

この年は、ごみの分別ルールをつくり、これを企画運営者、一般客を問わず、名大祭に関わる全ての人に呼びかけました。翌二〇〇〇年には、ごみの減量化とリサイクルの徹底をはかるため、ふだんの名古屋大学よりも細かい分別をおこなう「リサイクルステーション」を設けました。これは、「ごみステーション」として現在も続けられています。さらにこの二〇〇〇年には、名大祭特別企画としてこの二〇〇〇年形式で名古屋大学内のエコポイントを回るもので、二〇〇五年の第四六回まで続けられました。

名古屋大学は、二〇〇〇年に全国の大学に先駆けて「名古屋大学ごみ減量化宣言」をおこな

い、大幅なごみの減量に成功しましたが、名大祭はそれにさらに先駆けて取り組みをはじめたとはいえるでしょう。

また、二〇〇五年の第四六回からは、「バリアフリー情報マップ」がパンフレットに掲載されるなど、バリアフリーへの取り組みが本格化しました。二〇〇九年の第五〇回をみますと、情報マップのほかに、「授乳・おむつ換えスペース」の設置や、身体障がい者や高齢者、子ども連れでも参加しやすい「バリアフリー企画」の表示など、さらに充実しています。

◆地域社会との調和と交流

名古屋大学関係者だけではなく市民に広く開かれ、多くの来場者でにぎわう名大祭ですが、近隣住民の皆さんとの関係もそれに劣らず大切です。近辺の宅地化がさらに進むなか、早朝・夜間の準備・撤収作業や当日のステージなどの騒音、路上駐車の問題などに対して、苦情や厳しい意見が寄せられるようになりました。

そこで二〇〇三年の第四四回から、「地域社会との調和と交流」と銘打つての取り組みが始まりました。スピーカー音量の制限、準備作業や撤収作業の時間帯の見直し、名大祭後の打ち上げの禁止、住民の皆さんとの懇談会や挨拶まわりなど、さまざまな対応がなされています。まだ完全に問題を解決することはできていませんが、しだいに皆さんのご理解が得られつつあ

るようです。

また、二〇〇六年の第四七回からは、「地域を巻き込む名大祭」をテーマに、近隣住民の方々が参加しやすい名大祭を目標にしました。そこでこの年に生まれた（初期の名大祭にもあったので、正確には復活）のが盆踊り企画です。名大祭一日目（木曜日）の夕方に、「第一回盆おDori〜名大祭にこやあ!!〜」と題して行なわれました。この盆踊り企画は毎年好評で、名前を変えつつも現在まで続き、名大祭の定番企画になりつつあります。

◆伝統企画の終えん

二〇〇〇（平成一二）年以降の名大祭にみられる現象として、これまで時代の変遷にもかかわらず続いてきた企画などが姿を消したり、やり方の修正をよぎなくされたことがあります。

先ほどふれたテーマアピールという言葉が消えたこともその一つです。また、二〇〇三年の第四四回からは、一九八二（昭和五七）年から始まった「アマチュアバンドコンサート」の名前が消え、一九七七年から三〇回を数えたグリーン（ベルト）フェスティバルも、二〇〇六年が最後となりました。二〇〇九年の第五〇回には、一九七二年の第一三回から始まり、呼び方をさまざまに変えつつも続いてきた徹夜スケート企画が、徹夜ではなくなりました。

そして、二〇一〇年の第五一回には、名大祭の前の開学記念祭の時代から、あるいは名古屋

大学経済学部の前身にあたる名古屋高等商業学校などの歴史をひもとけば、戦前から行なわれてきたファイヤーストームがなくなりました。

名大祭は名大生によってつくられるものであり、名大生の意識や関心の変化にともなつて企画の内容も変わっていくことは当然だと思います。ただ、名大祭初期以来の行事がなくなりつつあるのは、少しさびしい気もします。

◆食中毒事件

さて、二〇〇〇年代の名大祭を語るに、残念なことではありますが、このことにふれないわけにはいかないでしょう。二〇〇八年の第四九回名大祭で発生した食中毒事件です。

三日目の六月七日（土）の午後、腹痛や嘔吐などの症状をうったえる名大生や来場者が続出、救急車で病院に搬送され、名大祭の会場は騒然となりました。この日の全企画は即刻中止され、名大祭本部実行委員会三年生役員が協議した結果、翌八日の全企画も中止となったのです。

名古屋市による調査の結果、黄色ブドウ球菌による食中毒で、原因は模擬店の一つで販売されたクレープであることが分かりました。被害者は、最終的に七七人に及びました。この事件は、テレビや新聞などで大きく報道され、名古屋市民に大きな衝撃を与えました。食中毒の直接的な要因は、本来名大祭では禁止されているはずの、当日より前の事前調理によるものでし



名大祭食中毒事件を報じる新聞
(中日新聞2008年6月8日)

たが、名大祭が開催される六月初旬といえは食中毒の発生しやすい時期だけに、名大祭の衛生管理のあり方そのものが問われました。

結局、翌二〇〇九年は、飲食関係の模擬店をいつさい禁止する措置がとられました。

そして二〇一〇年から、衛生管理体制を厳格にし、平日の模擬店および模擬店以外での取り扱い食品を既製品に限定、店舗数も大きく減らしたうえで再開となりました。大幅に規模が縮小された模擬店ですが、相変わらずの人気ぶりで、土曜日曜はエリアが来場者でうめつくされていました。

◆愛されて、半世紀

そして二〇〇九（平成二一）年、名大祭は五〇回目を迎えました。テーマもそれにちなんだ「愛されて、半世紀」が選ばれました。

この年、名大祭本部実行委員会委員長は、パンフレットの挨拶文で、「第五〇回名大祭はゼロからのスタートというよりもマイナスからのスタートでした。」と書いています。一九九九年の第四〇回のテーマは「0からの創造」でしたが、今回は前年の事件によつてうけた痛手をもなつてのスタートとなりました。

しかし同時に、委員長は次のようにも述べています。

一九六〇年に第一回が行われた名大祭も半世紀という長い歳月を経て様々に変化し、当初の理念は薄れ、イベント化が進んでいます。しかし、このように変化し続ける名大祭の過去四九回どれ一つを取つても、名大祭が皆さまに愛されてきた、という事実だけは変わりありません。これは、名大祭が誇りにするべき伝統だと思えます。

この年、来場者数は約三万五千人と、例年より約一万五千人減少しました。このことは、現在の名大祭における模擬店の存在の大きさを示しています。ただその一方で、模擬店（飲食店）が日本の大学祭の代名詞にすらなっている今日、この模擬店が全くない名大祭が、さらに新型インフルエンザが日本でも取り沙汰されていた時期にもかかわらず、これだけの来場者を集めることができたことは、むしろ高く評価されるべきではないでしょうか。